

議 事 録

会 議 の 名 称	第 2 回玉里地区小中一貫教育学校建設準備委員会
開 催 日 時	平成 2 7 年 1 1 月 6 日 (金) 1 9 時 0 0 分～
開 催 場 所	玉里保健センター 1 階 集団健診室
出 席 者	<p>【出席委員】</p> <p>小松 与士宏 石塚 匡巳 山崎 美奈子 鬼束 久也 瀬畑 誠 小山田 香代 上田 義宗 西村 恵子 中村 仁樹 大山 明弘 千葉 雅子 川又 義祐 山田 宏彦 箱田 俊男 大山 徳 小林 文雄 宮田 聡 羽鳥 文雄 村山 憲司 園部 文夫 田中 周 鶴町 文男 関 四郎 田上 義明 水野 貞雄 戸田 見成 山口 淳</p> <p>【欠席委員】</p> <p>戸田 見良 林 憲昭 笹目 賢一 亀井 優 上田 稔 大槻 良明 木田 強志 今泉 直美 戸田 大我</p> <p>【事務局】</p> <p>加瀬 博正 長谷川正典 皆藤 正造 鈴木 定男 比気 龍司 小林 利英 田山 伸一 田村 直弥</p>
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講話 「水戸市立国田小中学校」の小中一貫教育について ・ 質疑
会 議 資 料	別 紙 (会議次第、 他)
記 録 方 法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
公開・非公開の別	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開 (傍聴者 0人)

【委員長あいさつ】

委員長 第2回の建設準備委員会にお集まりいただき、誠にありがとうございます。今、社会問題として、少子化問題が叫ばれており、子供の数もどんどん減ってきています。現代社会では、孤独という問題がいかに深刻かということがあるそうです。そこには、人と人との繋がりや人間の居場所というものが必要ではないかということです。玉里地区でも小学校、中学校の子供達が段々と減ってきています。私達大人は、人と人との繋がりや色々な人との出会いの環境を子供達に作っていかなくてはなりません。子供の人数が減ってくると、子供達の切磋琢磨も減ってくる。そういった意味で、この小中一貫が子供達のこれからの人との繋がり、人間としての居場所といった大事な環境づくりに非常に役に立つのではないかと思います。今日は、水戸市総合教育研究所の小野先生にいらっしゃっていただき、国田小中学校の小中一貫教育についての講話をいただきます。我々は先生のお話をお聞きし、より良い玉里地区の小中一貫校の準備に関わっていきたいと思います。よろしくお願い致します。

【講師紹介】

講師：水戸市総合教育研究所 所長 小野 司寿男 先生

主に教員として様々な教育活動に取り組まれた。昨年度から、水戸市総合教育研究所の所長に就任。水戸市内49校の教育活動の責任者として活躍している。

○経歴

行政：茨城県教育委員会義務教育課指導主事、指導担当課長補佐
県内における教育行政の推進役として活躍。

学校現場：常陸太田市立峰山中学校教頭、
常陸太田市立河内小学校校長を歴任。

【講話】

「水戸市立国田小中学校」の小中一貫教育について

講師 水戸市には、国田小中学校という学校があり、平成7年から形としては小中一貫校とさせていただいている。その国田の現状や中身を伝えても、分かりづらいことが多いのではないかと思います。「国田小中学校の小中一貫教育について」と「9年間を一貫した特色ある教育活動」いわゆるカリキュラムについて、2つの資料とパンフレットを用意させていただいた。
まず、なぜ小中一貫教育が話題になってきたかということから話をさせてい

ただきたい。当面、学校教育には色々な課題があり、それを解決するために日夜、学校の先生や教育委員会、もしくは行政の方達が努力をしている。大きく分けると、学力の問題、問題行動と呼ばれる子供達の生活状況の問題、地域との連携や学校が地域にある意義といったことが出てくるかと思う。この小中一貫校は、小学校と中学校の6年と3年という今の枠組みを一緒にし、9年間という長い期間で扱うということであり、なぜ小中一貫校がそれぞれの課題について良いのかを簡単に説明させていただきたいと思う。

学力の話を見せていただく。学力に関しては、何が良い、何が悪いといった色々な議論があるので、ここでは控えさせていただきたい。学力を上げるために何が重要かという、良い授業、分かりやすい授業、子供達の興味や関心を惹きつけながら学習指導要領に則った目的が達成できる授業がきちんと出来ること。教員がどのような授業を展開するかが大きく関わってくる。例えば、小学校の教科について。教員の免許制度は、小学校免許、中学校の教科の免許、高校の教科の免許と分かれている。いわゆる専門の免許となっている。小学校免許は小学校の全てを対象とした免許となっており、中学校と高校の免許は教科毎の免許となっている。なので、小中一貫校では、小学校の理科や算数の授業に中学校のいわゆる専科と言われる免許を持っている先生が関わりをある程度持てる。例えば、中学1年の理科や数学の先生が小学5、6年生の教室で授業を行うということが、ある程度の制度の中で可能になると思う。いわゆる教科担任制が非常に組みやすくなる。小学校の先生が悪いといっているわけではない。専門的な、より深い授業の展開が小中一貫校の中では可能になる。また、教科の学習する内容には流れがある。数学、算数を例にとれば、小学校低学年からスタートし、小学校高学年、中学校1、2、3年生、そして高校受検というように繋がるとすると、基本となるものを押さえておけば、何年後の中学何年生で出てくる時に効果的になる。非常に体系的な長い流れの中で授業計画を組み、授業をすることができる。つまり、流れの中で非常にスムーズかつ効果的な授業形態、もしくはカリキュラムの内容を組むことができる。今まで小学校単位で行っていたこと、中学校単位で行っていたことをバラバラに行わず、流れの中でできるということは、授業に非常に役に立つことであり、必ず成績の向上に繋がるものであると思っている。それを行ってきた学校では、全てではないが、非常に目覚しく成績が上がるという現象がある。学力向上という点を見た時、9年間の流れをスムーズにしながら、専門の先生がある程度の小学校の学年まで関わられるようなシステムが学校にあれば、非常に効果的であるということ。

2つ目は、生徒指導関係。いわゆる中1ギャップと言われるものを知っている方もいるかと思う。この言葉は便宜上使用することはあるが、実は公に認められている言葉ではない。小学校から中学校に進学する時には、色々な問題行動、暴力行為や器物損壊などがいきなり増える。また、学校不適應、いわゆ

る不登校の子達の出現率が9年間で最も高い学年は、中学校の3年生。しかし、前の学年から次の学年に移行する際の増え方、前の学年と今の学年を比べた時に増加率が一番大きい時期は、小学校6年と中学校1年。つまり、中学校1年生になると、学校不適應が大幅に増えるということ。これが何故かという研究が色々とされたわけだが、1つは中1の壁がある。小学校の家族のような優しいところで何度も何度も繰り返し、褒められといったスタイルの授業が、中学校の1年生になると教科担当に変わる。毎日、毎時間、違う先生が来て、授業が早く進む。クラス担任の先生はいるが、担任外の先生がたくさんいる。本当は良いことだが、それが全ての生徒にとって良いことではないということが言われている。それから、人間関係。先輩と後輩の関係がある部活動などが始まる。小学校では、あまり先輩後輩ということは聞かないと思うが、中学校では、非常に厳しい環境に置かれる。中学校で担任の先生、教科の先生に挨拶をしないが、先輩に挨拶するということがよくある。もの凄い人間関係の中で生徒たちは生活している。小学校6年生から中学校1年生になると、いきなりそれを要求される。乗り越える壁が非常に高く、そのために問題行動等が増えていると言われている。これは、それぞれ個人の意見になると思うが、壁を高いまま越えさせろという意見もある。実は私もそう思う。今は優しい時代なので、その壁を下げる。現実には、そうせざるを得ない現状がある。そういった時に、いわゆる小学校と中学校の大きな段差、壁を平らにする1つの方法として、その学校の中で中学校の先生や小学校の先生と一緒に9年間生活するということが非常に有効ということが分かっている。不登校や問題行動に関しては、6年間、3年間の区別なく、9年間の中で人間関係が訓練されることが非常に有効だということ。中学校1年の夏休み前までは、小学校に逃げ帰る子供もいると思う。あまりに辛くて、帰りに自転車で小学校に行き、小学校の時の担任に話をすることがある。そういったことも可能になる。つまり、9年間ずっと同じ先生がいるとは限らないが、そういった人間関係を上手に構築し、カバーリングしてくれる人との関わりが学校の中にあれば、子供達に非常に有効であるということ。それが、いわゆる問題行動に対応する例。1つ典型的な例がある。今から数年前、ある小学校の5年生のクラスで学級崩壊が起きた。男の子達が暴れ、担任がどうしても抑えられなくなり、非常に大変な状況だった。子供は1回大人を越えると、クラスの中では本当に信じられないような状況になる。学級崩壊は、そのように起きている。校長先生、教育委員会の先生が策を練り、隣接する中学校の数学、社会、体育の先生に何時間かクラスに来てもらった。いわゆる小学校の越えられてしまった先生の代わりに中学校スタイルの生徒指導を行ってもらった。そうすると、崩壊してしまった学校の子供達は1ヶ月で戻った。それには様々な要素があるのだが、そういったことを1つの学校の中で上手に繰り返し対応できれば、すごく良いこと。そういった形で9年間を大切に扱えるのであれば、小中一貫というスタイルは、最

高に理想的なものだと考えられている。

3つ目は、地域の問題。中学校区は、小学校区をいくつか集めたものだと思うが、なかなか思うように連携が出来ていないのが現状ではないかと思う。地域の人達の関わりを小中別々で行っている。これから学校は、どのように地域を理解し、どのように地域を勉強し、その地域に生まれ育ったということに対し、どのようにプライドを持って成長するかということが大きな課題の1つになる。地域を1つの学区の中で考えた時、小学校から中学校に進学して新たな別な事をやるのではなく、一貫性のあるもので地域に関する学びが出来れば、それは最高であるということが考えられる。そういった意味でも、小中一貫のスタイルは非常に役に立つシステムだと考えられる。これまで学校が課題としていたある程度のものに関しては、小中一貫のスタイルは対応できる、非常にやりやすい。色々な問題があるが、やるべき価値があるということで日本全国で爆発的に広がっている。3年前の調査では約30%の市町村立の学校しか行っていなかったが、最新の調査では85%~90%近くの学校が行っている。ただし、課題はたくさんある。建物の問題、教員の問題がある。教員は異動もあり、好きな人を自由に置けるわけではない。しかし、これから新しく学校を作ると考えているのであれば、日本の教育界の中では、すでに今までのような昔からある学校のスタイルがほとんど無くなってきていることを理解いただければと思う。色々な形があるので、それぞれの地区、地域の特色に合わせた形で運営するべきであり、国田小中学校がそのまま参考になるというものではないと思う。特に今、特別な状況の学校になっているので、あえて平成25年度のデータを持ってきている。それでは国田小中学校の話に入りたい。国田は水戸市ではあるが、本当に田舎にある。それほど人が住んでいるところではなかった。平成7年に大幅に人数が減り、小中一貫とした。その時点では人数が少なく、小学校と中学校を同じにした方が便利だろう、校長も1人で良いかもしれないということで始まった。その時のビジョンでは、小中一貫を教育の目的として行うということであったかは疑わしいと私は思っている。それが平成7年のスタートであり、その後色々課題が出てきた。どんどん人が減っていってしまうので、人を増やさなくてはならない。しかし、私立と違い、勝手な事はできない。どうしたら人が増えるかを考えた。いわゆる学校の特色を打ち出し、周りから人が集まってくる学校にしようということで始まった。いわゆる小中一貫校の校舎、小学校と中学校が一緒になるシステムが稼働できる校舎を作り、幼稚園も一緒に入れた。また、小学校1年生には、幼稚園が近くにあった方が良い。小学校1年生は義務教育の中で一番下だが、その隣に幼稚園生がいる場合は、自分達が先輩になる。給食の準備では、手伝わなくても自分達でやるようになる。要するにプライドが生まれ、それなりの自立性が出てくる。どんどん人数が減っていってしまうので、特色あるものを作ろうということになり、教育特区とした。専門的になってしまい申し訳ないが、特区

を国へ特別に申請をすると、ある程度色々なものを市教育委員会独自で行うことができる。それによって、英語の時間や国田のスタイルを作り、学年区分を4-4-1とした。これは1年生から4年生、5年生から8年生、9年生としている。便宜上分かれているが、学校内でそのように区切られているわけではない。流れの中でそのように繋がっていると考えていただきたい。昔と最近の子供の成長を比べた場合、だいたい2年くらい昔より早い。国田の場合は、小学校1年生から4年生を1つのユニット単位、ベーシックグレードとして教育をしようということになっている。小学校5、6年生と中学校1、2年生をミドルグレードとし、中学校3年生をコンピレーショングレードとしている。この単位で集会や地域との交流なども行う。もちろん入学式や卒業式も行うが、小中合同で行う。入学式は、幼稚園、小学校、中学校の入学生が手を繋いで入学する。このベーシックとミドルとコンピレーションというグレードをつくり、そのかたまりで国田は教育をスタートしている。次に特色ある教育活動。「9年間を一貫した特色ある教育活動（平成25年度）」資料の矢印の幅は、4-4-1に分けた時に関わるものであり、最初の4年間の発達に応じた活動、次の4年間の発達に応じた活動という形でカリキュラムを組んでいる。国田には、3つの育てる能力があり、「かしこさ」と「やさしさ」と「たくましさ」となっている。この3つを4-4-1のグレードの中で、どのように育てていくかというカリキュラムを組んでいる。なので、他の学校と違うところと全く同じところが混在している。それを続けていくうちに、国田では不登校が減った。意外と田舎の地域は不登校が多い。中学校に入学する時は、通常であれば逆転現象というものが起きる。小学校で生意気だった子が中学校では関係が逆転する。そうすることで、人間性のある程度学び、やって良いこと、やってはいけないことが分かるということが起きる。その逆転現象が起きず、不適応を起こして学校に来れなくなってしまう、不登校になってしまうというのは、間違いなく地域の子供。そういったことが無くなった。もう1つは、問題行動が減少したということ。規模の小さい学校であり、色々なことをやるので、人を殴ったり、物を壊したりというような余裕はない。人に当たっている暇、物を壊している暇がない。また、点数は本当にびっくりするほど上がる。そういった形で何年間か行ってきたが、どうしても人が集まらなかった。地域の周りにいる人が入学しないと数が増えないということで、小規模特認校、水戸市内の学区ならばどこからでも入れるシステムを作った。それからまた少しずつ人が増え始めた。ただ、そうすると色々な問題がまた出てくるので、それにはかなり高い条件付けをしている。ここでは説明しないが、そういったものが必要になってくる。今、国でシステムが変更になってきており、義務教育学校といった話が出てきている。今のやり方であれば、国田はそのままスライドしても問題ないのではないかと思っている。ただ、水戸には他に15校の中学校がある。その中には、小学校と中学校が離れている分離型や小学校と中学校の敷

地の多くが接しており、真ん中がフェンスで区切られているような隣接型の学校もある。隣接型は、既に何年間か研究を進めている。そこでは、人の配置や学校のシステムなどが違うので、国田が行っていることをそのまま導入は出来ない。しかし、それなりのやり方といったものを3年間研究した。来年ごろからはフェンスを取り除き、小学校と中学校を渡り廊下で繋ごうとしている。それによって、どのようなものが出来るかを研究しようと考えている。ただ、これはあくまで、これまでの学校施設をそのまま活用した状況。本当の小中一貫というものを目指すのであれば、建物は小学校と中学校、出来れば幼稚園までが一緒の建物の中に入っているものが絶対必要であり、何よりもこれからの学校教育を見た時、ただ小学校、中学校を造るということは、ほとんどなくなるのではないかと思う。造ってみたは良いが、5年10年経ったら、やりたいことができない学校になってしまったということでは、本当に大変。何を小中一貫に求め、何を子供達を伸ばすために行い、どういった学校をつくるのかを十分に議論していただければと思う。国田は、そういった経緯で1つの形として出来上がった。そして、何年か行ってきた結果が残ったということ。教員と教育委員会、そして地域の人達の連携をどのようにしていくかがこれからの課題になるかと思う。

繰り返すが、中1ギャップの解消、学力の向上、地域の特色を生かした学習を行う場合には、この小中一貫は最高の形だと考えられる。現時点で教育界が考えられる候補としては、ベストなものだといえるかと思う。水戸では、特色ある学習を水戸スタイルの教育という形で進めている。水戸には、日本遺産に登録されたものだけではなく、徳川家から続く精神が1つの資産として残っている。その精神を受け継いだ子供達を育てていくため、まごころタイムを始めた。そのまごころタイムを実施するためには、小学校と中学校の計9年間の中で1つのカリキュラムをつくる必要があり、小中一貫システムを利用させてもらっている。それに組み込んでいなければ、今の取り組みはできなかったというように思う。

何か質問があれば、伺いたいと思う。

【質 疑】

委 員 中1ギャップに関して、先輩後輩のギャップが取れるという話があった。中学生が悪い事をしているところなどを小学校低学年の子が真似してしまうという問題はないのか。

講 師 ある。通常の学校の生活では、小学校低学年の子が中学校3年生を見る機会は少ないようなので、3年生が暴れていると、すぐ真似をする。中学3年生がテレビのダンスを夢中で踊っているところを見て、小学1年生がそれより上手に踊ってしまったということがある。それは必ずある。そういったこと

をどのように指導するかという課題は、通常の学校と同様にどこにもあると思う。

委員 小中一貫に伴って、学力が向上したという話があった。どのくらいの向上率だったのか。

講師 だいたいの話になるが、全教科18%から20数%アップしている。年によって前後はあるが、要するに70点平均だったのが85点くらいまで上がるということ。その理由は、いわゆるTTも含め、中学校の教員が乗り入れ、出来る範囲で専科の授業を行ったということだと思う。

委員 平成7年からそういった教育をしていたということか。

講師 いえ、平成7年は学校があっただけ。正式な年度がはっきりしないところがあるが、ここ6年ほど行っている。水戸は、10年ほど前に特区になり、効果が出てきたのは4、5年前から6年前にかけてとなっている。

委員 学力が向上したことによって、高校、大学に進学した後、地元に戻ってくる人数はどのくらいか。

講師 卒業した子供が地元に戻ってくるかというデータは持っていない。申し訳ない。進学についても、今のシステムになってから初めて、小学校だった子が今年に中学校3年生となった。今年の進学を楽しみに思っている。

委員 不登校が減った原因は何なのか。

講師 何人もの人間が丁寧に子供に向き合えるようになったということ。不登校は、色々な背景を持っているかと思うが、色々な先生がアセスメント、何故その子がそういう状況になっているかということを行ったことがある。そういったことが繰り返し様々なところで可能であるため、子供達の先の道が開ける。そのようなチャンスを多く得ることが出来るようになったということではないかと思う。何十人もというわけではないが、学校不適應の課題は改善されつつあるということ。

委員 小中一体型の校舎ということなので、玉里の地区では不安を抱いている方が多い。中学生が勉強したい時に小学生がちろちろしているのではないか、授業時間の45分、50分の違いをどのように克服するのかなどに疑問を持っている方が多い。

講師 宜しければ国田の方に見に来ていただければと思う。学校にあまりいない方は、きっとそのような不安は出てくるかと思う。しかし、小学校と中学校の授業を行う階数が分かれ、さらに校舎が左右に分かれている。普通教室の隣には、それぞれ特別教室が入っている。あまり授業中に騒がしいということはない。小学校のオープンスクールの方が騒がしいのではないかとと思われる状況。それは校舎の造り方によるかと思う。

委員 45分授業と50分授業はあまり気にならないのか。

講師 あまり気にならない。チャイムを使わなければ良い。

委員 小中一貫の話をすると、メリットはすごく多い。しかし、小中一貫の課題はあるのか。

- 講師 システムに関する子供と学校の課題は、あまりないと思う。むしろ教育委員会側にあり、人の配置やカリキュラムをどのようにして地域に合ったように作るかといったものがある。小学生と中学生一緒にいるから困るということは、今まで無かった。
- 委員 中1ギャップを取り除く、なだらかにするという話があった。今度は、高校に進むときに壁があると思う。中1ギャップを乗り越えた子が国田では高校に上がっているかと思うが、どうなのか。
- 講師 このシステムになって6年なので、今年の中学3年生が卒業して初めてとなる。
- 委員 4-4-1になってから初めてか。
- 講師 はい。壁というのは、例えが悪かったと思う。授業形態や学校運営のシステムが小学校と中学校では、かなり違うものがあるということ。中学校と高校のシステムはほとんど同じなので、そこは今まで聞いた事がない。発達段階でいうと、中学校3年生と高校1年生の間は、小学校6年生と中学校1年生の間のような発達段階でのトラブルが起きやすい状況ではなくなっているということではないかと思う。あまり高1ギャップとは聞かない。
- 委員 成績が優秀になると、進学校に上の子達は進学すると思う。小中一貫校での教育のような、どちらかという楽しい9年間の教育から高校に対応できると思うか。
- 講師 やって見ないと分からないと思う。私はいつも思うが、我々の想像以上に子供は力を持っている。色々なところで心配が出てくるかと思うが、少なくとも国田のシステムが害を及ぼすことはないと思う。
- 委員 国田は色々やっていると思うが、先生から見て、もっとやりたいことはあるのか。
- 講師 我々がまだ遠慮している状態だと思う。本当は何でもできると思う。もっと取り組んでもらいたいということがある。ただ、現状としては、我々教員がそこまでやったことがないので、尻込みするという現実がある。
- 委員 特区では出来るが、他では出来ないということが出てくるかと思う。特区を取った方が良いということはあるのか。
- 講師 必要な部分は出てくるかと思う。色々なことを自由に出来る理由が特区であれば、必要となると思う。よく特区は、すごいことのように言われるが、そんなことはない。水戸であれば、英語を少し早め実施するといった話。ただ、国が進めようとしている義務教育学校は、そういったものが対象になっていないので、おそらく特区のシステムそのものが無くなっていくのではないかと思う。
- 委員 学校の先生の配置問題などが出てくるかと思う。
- 講師 県に申請しなければ、両方の免許を持っている人に来てもらえないということがある。
- 委員 そうなると、取りにくいということになると思う。

講師 免許は、小学校だけ中学校だけの人もある。ただ、小中一貫を本当に価値のあるものにしようとするれば、教員の問題は最優先で解決しなければならない課題。なので、教育委員会が大変ではないかと思う。

委員 長い時間をかけ、これだけ素晴らしい小中学校ができたと思う。しかし、玉里地区は今から始める。小中一貫校ということなので、親も不安であり、子供達も在学中に一緒になるため、不安になっていくと思う。そういった子供達に対して、不安にさせないようにするには、どのようにしていったら良いのか。

講師 おそらく、小中一貫校が出来る前から小学校にいた子達、中学校にいた子達が一緒にその学校に行くということになった時の配慮かと思う。色々あるかと思うが、学校が小中一貫校になったとしても、授業や遊び、部活などに大きな変化があるわけではないということ。小学校と中学校が一緒になり、利便性が高くなる。心配ないということ伝えていただきたいと思う。例えば、小学5、6年生は中学校をものすごく気にし始めている年だと思う。その時に目の前にあるということによって、中学生になる時の不安などを持たなくてもすむのではないかと思う。国田がスタートした時と比べると、今は小中一貫教育に関しての情報量が全く違う。全国で取り組んでおり、国も率先して様々なことを行っている。なので、色々な資料を全国から集めて検討すると、良いものが出来るのではないかと思う。元々あった学校を使うとなると、非常に苦しいものが出てくる。水戸市では、双葉台という中学校と小学校で、その取り組みを行おうと思っている。新しい学校を作るのであれば、色々な先例を十分に活用し、先のことも考えなくてはならない。20年先にどのくらい人数が増えるか減るか。何年度に着工になるかは分からないが、早すぎるということはない。3年先か4年先であるならば、ここにいる方達だけでも色々な協議をするべきだと思う。

【その他】

事務局 次回、第3回の準備委員会は、水戸市立国田小中学校の学校視察を予定している。児童生徒の校内での様子や校舎、45分授業と50分授業の授業時間の使い方といったところを実際に見学するというを考えている。日時については、視察の受け入れ側である国田小中学校と調整している。学校には色々な行事等の関係があり、今年中は難しいということなので、年明けになると思う。日程が決まり次第、通知にて連絡させていただきたいと思う。

19:59 閉会